



笑ってねえ
やってらんねえ

飯舘村の母ちゃんたち 土とともに

出演: 菅野榮子 菅野芳子

監督・撮影: 古居みずえ

プロデューサー: 飯田基晴 / 野中章弘 編集: 上屋トカチ 整音: 常田高志

宣伝協力: 東風 配給: 映像グループ ローポジション

製作協力: 映像グループ ローポジション / アジアプレス・インターナショナル

製作: 映画「飯舘村の母ちゃん」制作支援の会

2016年 / 95分 / HD / ドキュメンタリー © Mizue Furui 2016

www.iitate-mother.com



原発事故から5年—— 古居みずえ監督が描く
へこたれない母ちゃんたちの愛しき友情ストーリー

畑を耕し 漬物つけて 食べるものは自分でつくる
ふたりで泣き 笑いながら “これから” を模索する



菅野榮子(かんの・えいこ)さんは79歳。孫に囲まれた幸せな老後を送るはずが、福島第一原発の事故で一転する。榮子さんが暮らす福島県飯舘村は全村避難となり、ひとりで仮設住宅で暮らすことになった。支えは親戚であり友人の78歳の菅野芳子(かんの・よしこ)さんだ。芳子さんは避難生活で両親を亡くし、ひとりで榮子さんの隣に移ってきた。「ばば漫才」と冗談を飛ばし互いを元気づける、2人の仮設暮らしが始まった。

榮子さんの信条は、食べるものは自分で作ること。ふたりで畑を耕し、トマト、キュウリ、芋、大豆、大根など様々な作物を収穫する。かぶや白菜の漬物、おはぎ、にんじんの胡麻和え・・・「おいしいよ」と笑顔で食卓に手料理を並べる。村の食文化を途絶えさせたくない、昔ながらの味噌や凍み餅(しみもち)の作り方を、各地に出向いて教えるようにもなった。

飯舘村では帰村に向けた除染作業が行われている。だが高い放射線量、変わり果てた風景……。ふたりは先の見えぬ不安を語り合い、泣き笑いながら、これからを模索していく。



あれから **5** 年――

監督の古居みずえは30年近くパレスチナの取材を続けている。特に女性や子どもに焦点をあて、『ガーダ パレスチナの詩』『ぼくたちは見た-ガザ・サムニ家の子どもたち-』など個人や家族に密着したドキュメンタリー映画を発表してきた。本作でも、故郷を奪われた哀しみを抱えながら、たくましく生きる女たちを丁寧に見つめていく。

原発事故から5年、未だに10万人が避難生活を続ける。避難の長期化による孤立や分断が深まるなか、私たちに何ができるのか。

本作を通じ、ともに“これから”を模索してほしい。

いまだから、見えてくること
何が損なわれたのか？ どうやって取り戻すのか？

と き
と ころ
入 場 料
問 合 せ
主 催

2017年2月5日(日) 14時開場 14時30分開演
山梨県立文学館 講堂
前売り 800円 当日 1,000円 (高校生以下無料)
メール 311yamanashi@gmail.com (担当: 小河原)
電話 090-1764-2072 (担当: 堀田)
さよなら原発なくそう核兵器 3.11 山梨行動実行委員会